

資 料

# ポートフォリオ学習を導入して

## Introduction of Portfolio Learning

山口さつき 中川初恵 廣岡憲造 佐藤慶如

Satsuki YAMAGUCHI, Hatsue NAKAGAWA, Kenzou HIROOKA and Yasuyuki SATO  
旭川大学保健福祉学部保健看護学科

キーワード：ポートフォリオ，学習，看護学生

### はじめに

中央教育審議会は、「学士課程教育の構築に向けて」<sup>1)</sup>の中で、「学習成果」を学生自らが管理・点検するとともに、大学としてこれを多面的に評価する手法として、学習ポートフォリオを導入・活用することを勧めている。また、「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」<sup>2)</sup>の中で、成果の評価に学修ポートフォリオなど具体的な測定方法を用いることを促している。教育の質に係る客観的指標調査票においても、学修成果の把握の項目に学修ポートフォリオの活用を挙げている。しかし、2019年度時点では、当科においては、まだ導入していない状況であった。

当科の卒業を間近に控えている4年生の中には、各領域看護学実習で得たことが次の領域看護学実習で活かせることが出来ない、主体性が育っていない、自己の課題が明確になっていない学生が存在し、対策が必須の状況であった。

そこで、早期から学生一人一人が、自らなりたい看護師を目標に一步一步前進していくことができるよう、2020年度1年生よりポートフォリオ学習を導入し取り組んできた。今後、より効果的にポートフォリオ学習を進めていくために、1年生のポートフォリオ学習における成果および課題を明らかにする。

### 1. 導入経過

「ポートフォリオとプロジェクト学習」<sup>3)</sup>を参考に、4年間のゴールシート（卒業時のビジョンおよびゴー

ルを記載する）、1年次のゴールシート（1年次終了時のビジョンおよびゴールを記載する）、取り組んだ成果を記入するシート、中間評価を記載する成長報告書（価値ある成長したことおよび今後の展望を記載する）を作成した。

1年生を5クラスに分け、入学直後のガイダンスの際に、各担当がクラスごとにポートフォリオ学習について、①ポートフォリオとは、②ポートフォリオの目的、③ポートフォリオのもたらす効果、④ポートフォリオ学習の進め方について説明し、各シートと専用のファイルを渡した。その後、各担当が、学生との面接の際に、ポートフォリオ学習の進め方の指導、各シート記載状況の確認をした。

2月または3月の最終面接の際に、担任はゴールへの到達状況を学生とともに振り返り、今後の課題を明らかにすることを試みた。

### 2. 教員の取り組み状況

各クラスの担当教員の面談回数、PDCAサイクル（Plan-Do-Check-Act cycle）で展開できた学生数および自己の課題を明確にできた学生数を表1に示す。面談回数は多くて8回、少なくても2回と差が生じており、面談が多いクラスほどPDCAサイクルで展開できた学生数や自己の課題を明確にできた学生数が多かった。

表1 各クラスの面談回数と成果

	面談回数	PDCAサイクルで 展開できた学生の割合	自己の課題を明確に できた学生の割合
1クラス (13人)	8回 <sup>1)</sup>	100.0%	100.0%
2クラス (15人)	3~4回	46.7%	100.0%
3クラス (13人)	2~3回 <sup>1)</sup>	30.8%	100.0%
4クラス (8人)	2~3回	25.0%	75.0%
5クラス (10人)	2回 <sup>2)</sup>	30.0%	40.0%
1年生全体 (59人)	-	49.2%	86.4%

1) 電話・Microsoft Teams による面談を含む。  
2) シート提出に対してコメント1回。

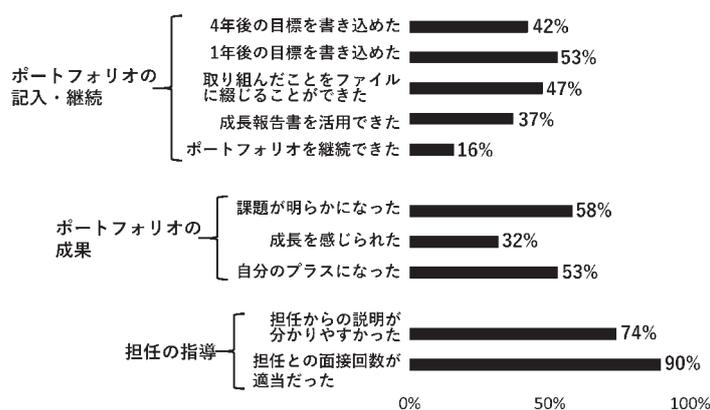


図1 単純集計結果 (「そう思う」「ややそう思う」の割合)

### 3. アンケート調査

ポートフォリオ学習を導入してから1年が経過した2021年3月に1年生に対して、旭川大学研究倫理委員会の承認を得て (no.20-10)、無記名によるオンライン (Microsoft Forms) にてアンケート調査を行った。アンケートは、4段階のリッカート尺度を用いた。質問内容は以下の通りとした。

- (1) ポートフォリオの記入と継続に関する質問  
4年後と1年後の目標の記入、成長記録用紙への記入、用紙への記入の継続に対する自己評価と、その理由。
- (2) ポートフォリオの成果に関する質問  
ポートフォリオ実施による自身の成長の確認に対する自己評価と、その理由。
- (3) 担任の指導に関する質問  
担任による説明、面談回数に対する評価。

### 4. 結 果

Microsoft Forms によるアンケートを62人に配信し、21人 (34%) から回答が得られた。回答者21人のなかで完全回答が得られた19人 (31%) について分析を行った。

#### (1) 単純集計

##### (i) ポートフォリオの記入と継続に対する結果

選択式の質問では、「ポートフォリオを継続できた」と回答した者が、比較的になかった。取り組んだことをファイルに綴じることができた学生は半分に留まった。

自由記述式の回答では、目標の記入について、1年後の目標に比べて4年後の目標を書き込めなかった理由として、「まだ何も分かっていない1年生の4月に、4年後の目標を立てると言われても困る」という意見が挙げられた。

継続が困難な理由として、①単純に面倒くさいこと (3件)、②ポートフォリオの意義が理解できていないこと、③様式が分かりにくいことに加え、記入に関する担任からの十分な

表2 質問項目間の相関（スピアマンの順序相関係数）

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩
①4年後の目標を書きこむことができた	1									
②1年後の目標を書き込むことができた	.779**	1								
③1年間の取り組みをファイルに綴じることができた	.618**	.622**	1							
④成長報告書を活用することができた	.811**	.826**	.529*	1						
⑤ポートフォリオによって取り組むべき内容が明らかになった	.846**	.647**	.615**	.628**	1					
⑥ポートフォリオを継続して実施できた	.513**	.428	.693**	.552*	.526*	1				
⑦ポートフォリオ学習で成長を感じられた	.877**	.741**	.626**	.811**	.602**	.634**	1			
⑧ポートフォリオ学習は自身のプラスになった	.805**	.616**	.675**	.670**	.839**	.624**	.662**	1		
⑨担任からのポートフォリオの説明は分かりやすかった	.368	.254	.385	.289	.506*	.443	.281	.423	1	
⑩担任との面接回数は妥当だった	-.355	-.290	.000	-.185	-.332	.000	-.203	-.365	-.078	1

説明がなかったことが挙げられた。

(ii) ポートフォリオの成果に対する結果

選択式の質問では、過半数が「ポートフォリオによって自身の課題が明らかになった」と回答した一方で、「ポートフォリオによって成長を感じられた」者は少なかった。

自由記述式の回答では、目標の達成について、「自身の成長とポートフォリオの実施は別の問題」という意見がある一方で、「ポートフォリオへの記入が、計画的な目標達成に役だった」という意見も挙げられた。

(iii) 担任の指導に対する結果

選択式の回答では、過半数が担任との面談に満足していた。

自由記述式の回答では、説明が分かりやすかった理由として「ポートフォリオをきっかけとして、自身の傾向について担任が親身に相談に乗ってくれた」という意見がある一方で、「担任もよく分かっていなかった」といった担任自身のポートフォリオに対する理解に不満を持つ意見もみられた。

(2) 質問項目間の相関分析

質問項目間の相関についてスピアマンの順序相関係

数を計算し、相関行列を作成した（表2）。

担任との関わりを除いて、全ての質問項目の間に有意な相関がみられた。すなわち、目標を適切に設定できた者は継続して用紙に記入し、一年間の成長も実感できた。

担任によるポートフォリオの説明が分かりやすかった者は、自身の課題も明らかになったと回答した。

## 5. 取り組みの成果および今後の課題

取り組みの成果については、約8割の学生が自己の課題を明確にすることができていた。教員が面談を通してのポートフォリオの指導を多く行っていた場合、自己の課題を明確にすることができた学生が多かった。目標を適切に設定できた学生は、ポートフォリオ学習用紙を活用し、それを俯瞰することで一年間の自己の成長を実感することができた。

今後の課題については、ポートフォリオの意義が理解できていない学生は、継続して行うことが出来ない傾向があるため、一人一人の理解度に合わせて、担任がポートフォリオの意義および進め方を説明する。一度の説明だけでなく、経過の中で、適切に継続することが出来ているか面談をして確認していく。

記載シート様式が分かりづらかった。PDCAサイクルにそって展開していくようにするとつながりが見えてわかりやすいため、4年間のゴールシート以外は、PDCAサイクルにそって展開できるように修正する。4年間のゴールシートは4年後の目標を立てることは難しいという学生の意見があったが、目標はその都度変更していくものであることを再度伝えていき、一年ごとに見直していく機会を設ける。

取り組んだことを記載することを、半分の学生が出来ていなかった。説明されていない、様式が分かりづらいなどという理由であった。記録できていた学生の記述にある「自分が出来た事とできなかったことを書いてまとめると、次どうすればよいか具体的になる」ということを担任が伝えていき、継続の必要性を促していく。

ポートフォリオを継続できた割合が低く、その理由として面倒であったが目立つ。行うことの必要性が感じられなかったり、興味が無かったりしたことが考えられる。担任によるポートフォリオの説明が分かりやすいと感じた学生は、自身の課題を明らかにできる、面談の回数が多いクラスは継続してポートフォリオを通してPDCAサイクルが出来ていたということから、担任の関わりが鍵となっていることが分かる。そのため、前述したように担任は学生にポートフォリオを行うことの意義を伝えていき、ポートフォリオを通して学生自身が目指したい自分に近づいていくことができるよう問いかけ、見守り、伴走し続ける必要がある。今回は新型コロナ禍で登学規制があり対面面談回数には限界があった。オンライン会議システム（Microsoft Teams）は、対面面談に比べると互いの時間融通が効きやすいと思われるため、このシステムを利用することにより、学生も教員も負担が少なく継続した関わりが出来ると考える。

## 6. おわりに

ポートフォリオ学習を導入してみたが、初めてのことであったこと、新型コロナ禍であったことから、学生に十分な説明と確認が不十分な状態で進めていた。そのため、活用することができなかった学生が半数以上であった。ポートフォリオ学習の目的、方法がわかり活用できた学生は、計画的に進めていき、目標達成することができているので、これからも課題に取り組み進めていく。尚、アンケートの回収率が34%と低かったため、ポートフォリオ学習の成果を把握するには限界があったことは否めない。

## 引用文献

- 1) 中央教育審議会：学士課程教育の構築に向けて、[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1217067.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1217067.htm) (2021.12.13)
- 2) 中央教育審議会：新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて、[https://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2012/10/04/1325048\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2012/10/04/1325048_1.pdf) (2021.12.13)
- 3) 鈴木敏恵：ポートフォリオとプロジェクト学習，8-11，医学書院，2011.